コレクティブ・インパクトアプローチによる地域子育て支援
― PBL（Project Based Learning）型授業について ―

Regional childcare support using collective impact approach
― About PBL (Project Based Learning) type class ―

山　村　けい子*

（令和３年12月17日受理）

要約

昨今、核家族化が進む中、保育内容「人間関係」の授業の中で都市化することによって地域関係、近隣関係の衰退は、地域の子ども関係の衰退化のもつながっている。地域の子育て支援の重要性を知り、子育てには「地域力」が不可欠であることも分かってきている。

学生が、地域の課題を自らの事と捉え、「保育科の学生の強み」が活かし、東播磨県民局ビジョン委員の方々と一緒に取り組み、協働して「もっと何かできないか」と解決方法を探っていき、学生自身の地域に対する意識の変容を目的とした。その授業方法は PBL（Project Based Learning）型授業を取入れた。まず、事前に授業、実習で経験した中で個人では取り組むことが難しいが、協働ですることでできることを授業の中で話し合いを持った。東播磨県民局ビジョン委員の方々とワークショップをし、意見交換をした。その後、交流前と交流後の地域の方々との話し合いのなかで変わったことの感想のアンケートをとり、分析をした。その結果、地域の多様な人たちと積極的に協働することで「課題解決」が導かれることを実感し、学生自身の交流前と交流後の地域の子育てに関する意識の変容が明らかになった。

キーワード：地域子育て支援、コレクティブ・インパクト、PBL
keywords：regional childcare support, collective impact, PBL

１．はじめに

昨今、核家族化が進む中、保育内容「人間関係」の授業の中で都市化することによって持たされた地域関係、近隣関係の衰退は、地域の子ども関係の衰退化のもつながっている。地域の子育て支援の重要性を知り、子育てには「地域力」が不可欠であることも分かってきている。

保育所保育指針、幼稚園教育要領等が2018（平成30）年に４回目の改定があった。その中で５点の基本的な方向性があり、その１つとして次のように書かれている。

（４）保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性

前回の保育所保育指針改定により「保護者に対する支援」が新たに章として設けられたが、その後も更に子育て家庭に対する支援の必要性は高まっている。それに伴い、多様化する保育ニーズに応じた保育や、特別なニーズを有する家庭への支援、児童虐待の発生予防及び発生時の迅速かつ的確な対応など、保育所の担う子育て支援の役割は、より重要性を増している。また、子ども・子育て支援新制度の施行等を背景に、保育所には、保護者と連携して子どもの育ちを支えるという視点をもち、子どもの育ちを保護者と共に喜び合うことを重視して支援を行うとともに、地域で子育

（＊やまむらけいこ　保育科講師　幼児教育学・保育学）

て支援に携わる他の機関や団体など様々な社会資源との連携や協働を強めていくことが求められている。こうしたことを踏まえて、改定前の保育所保育指針における「保護者に対する支援」の章を「子育て支援」に改めた上で、記載内容の整理と充実を図った[1)]。

第３回目の改訂においても「地域の子育て支援」については、書かれているが、４回目の改訂では、さらに「地域の子育て支援」も「保育所の保護者の子育て支援」同様に必要性が高まり、「子育て支援」として大きく捉えられている。

２．研究目的

保育を学んでいる学生にとって保育所での保護者支援については学ぶ機会はあるが、保育所等の施設を利用している家庭の子育て支援ではなく、在宅で子育てをしている家庭への支援について学ぶ機会も必要だと考えられた。PBL 学習と保育の先行研究が、あまりなく、大学が色々な分野の学習方法の１つとして取り組んでいる。また、ESD（Education for Sustainable Development = 持続可能な開発のための教育）を基盤に高等教育を考えているが、ESD（以下省略をする）と PBL はともに「主体的な学び」であるという点では関係があり、先行研究もある。

今回は、PBL（Project Based Learning）型授業を取入れ、学生が、地域の子育て支援の課題を自らの事と捉え、地域の方々と連携をして「もっと何かできないか」と解決方法を探っていき、その解決方法を具体化することで学生がより現実のことと捉えらえるのではないだろうか。

授業で学んだことを地域の方々と話し合うことにより新たな発見にもつながり、東播地域（加古川市、高砂市、明石市、播磨町、稲美町）の方々と交流から始めた。社会連携オフィスの職員の協力を得て、東播磨県民局東播磨地域ビジョン委員の方々と一緒に取り組むことになった。その取り組みの方法の定義として「コレクティブ・インパクトアプローチ」の方法の定義を取り入れることにより、学生自身がワークショップをする前と後では、地域の子育て支援には地域の人々との協働が重要であることを理解し、地域の子育て支援に対する意識の変容があることを明らかにすることを本研究の目的とした。

３．コレクティブ・インパクトアプローチ

「コレクティブ・インパクトとは個別の努力の限界を超えて、協働を通じて大きな変化を生み出そうという、新しいアプローチ」[2)] である。

では、「コレクティブ・インパクト」とはどのようなものであるかをもう少し詳しく述べたいと思う。

「異なるセクターから集まった重要なプレーヤーたちのグループが、特定の複雑な社会課題の解決のために、共通のアジェンダに対して行うコミットメントである」[3)] である。共通のアジェンダとは、集まった人達が一緒に築き上げた課題に対しての理解とこれからの方向性を意味している。つまり、「多くの人が関わる、複雑でむずかしいと思われるテーマに関して、すべての関係する重要プレイヤーが集まり、互いに補い合い強化しあえる関係性を作り、テーマに関する共通の理解を構築しながら、全体のインパクトにつながるように、それぞれに出来る活動を具体的にデザインし実行する」[4)] と定義されている。

また、ここでは今までの「コラボレーション（協働）」とは大きく違う点も述べられている。これまでの協働は、同じ方向性や関心を持っている少数の組織同士の連携だと言われている。そして特定の組織のリーダーが問題解決に向けたストラテジーを立てていた。一緒にしているほかの組織は依頼をするという方法を取っていた。今までの協働関係ではなかなか解決に至らないと言われてきた、

そこで新しい協働の方法として「システム全体から多様な利害関係者を招集し、対話を通じて現状を理解し、ゼロからの解決策を見出していくというプロセス」[5)] が特徴であり、「コレクティブ・インパクト」と言われている。この方法を参考に取り入れ、「コレクティブインパクトアプローチ」とした。

今回学生とビジョン委員の方や NPO の方のことを以下のように図に表した。

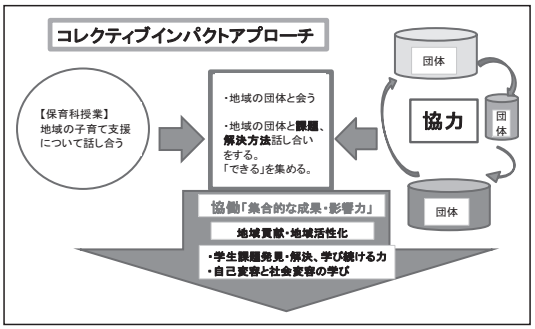

図１　（筆者作成2019年）

４．PBL 学習

PBL 学習とは「project based learning」は以下のように２つの違いがある。１つ目は課題解決学習（PBL: problem-based learning）で1960年代後半の高等教育におけるメディカルスクールにルーツがある。２つ目は、プロジェクト学習（PBL: project-based learning）で20世紀初頭の初等教育におけるキルパトリックの「プロジェクト　メソッド」にルーツがある。今日では高等教育まで使用されている。

大学で取り組んでいるのは２つ目の「project-based learning」プロジェクトである。

そしてプロジェクト学習とは、「実世界に関する解決すべき複雑な問題や問い、仮説を、プロジェクトとして解決・検証していく学習のことである。学生の自己主張型の学習デザイン、教師のファシリテーションのもと、問題や問い、仮説などの立て方、問題解決に関する思考力や協働学習の能力や態度を身につける」といわれている。２つの共通点として課題解決を学生が協働しながら学習をし、実践していくことができるようになるのである。

５．研究方法

⑴　授業で学生（対象：兵庫大学短期大学部保育科２年生）に大学の近隣の地域の子育てについて「個人」として課題を探ることから取り組んだ。保育内容「人間関係」の授業で学生たちに「保育所、幼稚園、認定こども園」が「地域の子育て支援の中心的な役割」をすることを理解する。地域においてどのような課題があるかを考え、それは、「個人で解決できるかどうか」という問いかけを考える。その結果をもとに次は学生同士がグループになり（４～５人）で解決できる方法を考えた。

⑵　グループで解決ができなくても地域の人々や団体と協力することで解決するために「どのような方法があるか」をグループで探ることにした。「コレクティブ・インパクトアプローチ」は、事前に授業の中でどのようなアプローチであるかを学び、その解決方法として「コレクティブ・インパクトアプローチ」の方法を取り入れることにした。その結果をもとに次は東播磨地域ビジョン委員の方々と２回ワークショップ形式で話し合いをした。１回目は打ち合わせに各クラスから１～２名の少人数で行う。（A、B、Cの２年生３クラス87名）

１回目：10月29日（13～15時すぎ）東播磨地域ビジョン委員３名　学生５名

２回目：１月10日（14～16時すぎ）東播磨地域ビジョン委員４名　学生13名

３回目：１月21日（14～16時すぎ）東播磨地域ビジョン委員５名　学生23名

６．研究結果

まず、授業では、地域子育て支援においてどのような課題があるかをグループで話し合った。その結果として課題が①「行事・施設等に関して」、②「子どもと保護者との関わり」、③「高齢者との関わり」の３つのカテゴリーに分けられた。

そしてその課題は「個人」でできないことも「協働」ですると取り組める活動としてあげられた。そしてビジョン委員の方からの質問「保育士でなくても子育て支援ができるのではないか」などの質問を受けた学生たちは、実習や授業で「保育の専門性」についてそれぞれが、積極的に意見を述べていた。そこで保育科学生の「強み」が何であるかを再認識し、ワークショップへの参加は、自

由参加にした。授業で出た課題をもとに学生と東播磨地域ビジョン委員の方々と２回ワークショップ形式で話し合いをした。その後、学生には「参加した目的ついて」のアンケートをまとめた。「地域の方と今、問題になっていることを一緒に話すことでいろんな意見が出て、気がつかなかったことに気づくことができるいい機会だと思った」など様々な意見が出た。

⑴　授業内で話し合い（科目「保育内容　人間関係」）

１）グループ（４～５人）の話し合いの結果

図２）の結果から「運動会、音楽会、発表会、マラソンなど」保育所内で行われる行事が多数であった。それ以外では、保育所外で行われる活動がほぼ同数であがっていた。３つのカテゴリーに分けられていたが②「地域の高齢者の方との関わり」では、「公民館で地域の高齢者の方と遊ぶ」、「老人施設へ行き、子どもと一緒に遊ぶ。（敬老の日・子どもの日）」とあまり意見は出なかった。③「子どもと保護者との関わり」では「虐待の子どものケアをする」、「子どもの悩みをきく」、「孤立している母親の支援をする」、「子どもに自分の得意なことを教える」と保護者と関わり、支援するのだが、子どもに対しての意見も含まれている。保護者との関わりより子どもへ関わる事のほうが学生にとっては、関わりやすいという事だろうか。

具体的な解決案としては、「高齢者の方々と子ども達と一緒に過ごす」という意見が多く出ていた。公園（絵図あり）や水族園、遠足などの意見から「子育てあそび場マップ」作りという具体的な解決法としての意見も上がっている。

⑵　東播磨県民局内での打ち合わせ

１）１回目

日　時：10月29日午後
場　所：東播磨県民局ビジョン課会議室
参加者：東播磨地域ビジョン委員３名
　　学生５名

まず初めに打ち合わせ行く前にＢクラスが授業で「地域での子育てに関する困りごとはなにか」などの話し合いをした。Ｂクラスで話し合った結果を各クラス１名ずつ３名の学生と東播磨県民局のビジョン委員の方とビジョン課女性職員の方と話し合いをした。その翌日、Ａクラス、Ｃクラスとそれぞれの授業の中で前日の報告後、グループで「できること」を話し合った。積極的に話し合っている姿がうかがえみられた。

２）２回目

日　時：１月10日午後
場　所：東播磨県民局ビジョン課会議室
参加者：東播磨地域ビジョン委員４名
　　学生13名　自由参加

テーブルを２つに分け、ビジョン委員の方から質問を受けた。

質問内容は以下のとおりである。

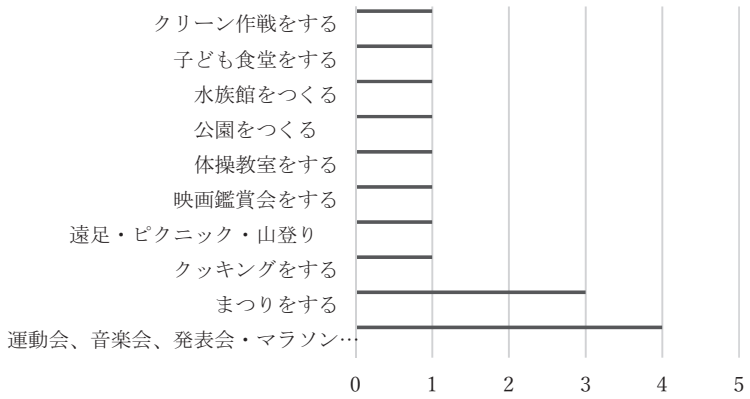

図２）行事・施設等に関して

【質問】
Q．保育士でなくても子育て支援はできるのではないか
Q．子育て経験をしなくてもできるのか
Q．どんな人（NPO）に会って話をしたいか
学生は授業で学習した回答をしていた

学生はそれぞれの質問に対して授業で子育てについて学んだことを述べていた。

3）話し合いの後（1、2回目）のアンケート（まとめ）

【質問】「1．今回参加した目的は何ですか」という質問結果が以下である。

・保育を通して社会をよりよくすることができればと思って参加をした。
・NPO に参加されている方はどのようなことをされていて、何を感じているかが気になった。
・1回このような行事に参加して地域の方とお話をして色々考えるという経験も大切だと思ったから。
・地域の方と今、問題になっていることを一緒に話すことでいろんな意見が出て、気が付かなかったことに気づけるいい機会だと思った。
・地域の方と交流したかったから。
・普段子育ての話や将来のことを共有したりすることがないのでいろんな意見を聞きたいと思ったから。
・保育の勉強になるし、地域の方と交流するのは貴重な体験だと思った。
・NPO カフェというものを初めて聞いて普段学校やバイトで機会がなかったけど今日友達と打ち合わせに参加したとき、意見を言ったり、聞いたりして客観的に自分の考えを考え直すことができたのでもう1回 NPO カフェがあるとわかり参加したいと思った。

書かれていた内容は、学生の感想はそのまま記述しているが、ほとんどの内容が「良かった」という回答であった。やはり NPO 団体のことや世代の違いの方々と話すことは少し戸惑いがあったのだと思われる。この回答を見る限り実施をしてよかったといえる。

4）地域の方と話し合い（NPO カフェ）

日　時：1月21日（火）14：00
場　所：東播磨県民局ビジョン室会議室
参加者：東播磨県民局ビジョン委員4名、
　　学生23名（学生は自由参加）
ファシリテーター：
　　兵庫大学　社会連携オフィス職員1名

(1)　4つのグループに分かれる。
①自己紹介
②まずそれぞれ「子育て」について思っている意見を付箋に書いていく。
③それぞれ意見交換をする。

それぞれのテーブルに地域のビジョン委員の方1名ずつ参加をしてもらい、話し合いを進めた。

写真1）話し合いの様子

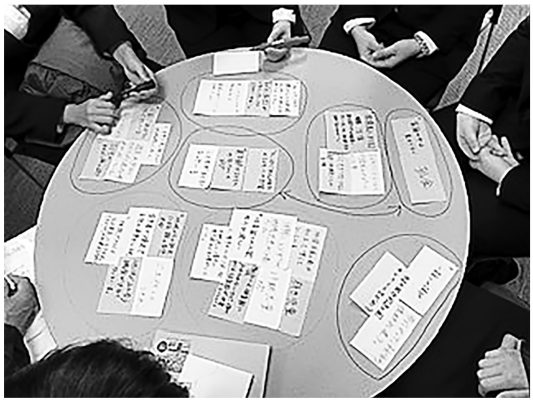

写真２）付箋に考えた事を書く

写真３）グループ発表

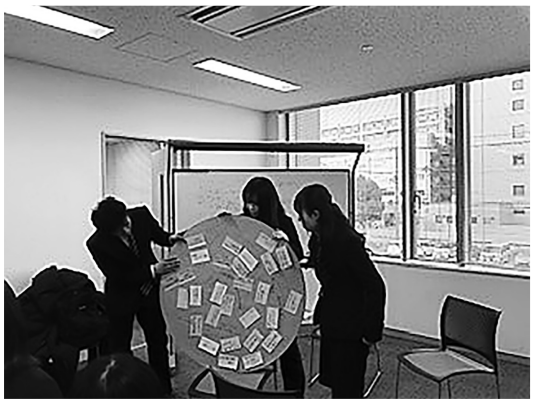

写真４）グループ発表②

それぞれのグループが、「待機児童の問題」、「世代間交流」、「子育ての方法」など各グループで出た意見をまとめて発表をした。

５）学生への最終アンケート結果

図３）の結果からは、「先生の話で興味を持った」という学生が多かった。次に「いろいろな人の意見を聞いてみたかったから」であった。「色々な人の意見を聞いてみたいと思ったから」という回答が多かったが、積極的な意見であり、それが行動につながるという点においては、このワークショップをしたことの成果であると言えるのではないだろうか。

多くの意見にも学生の積極的な意見が含まれており、今後の活動に期待が持てる。学生の意見を踏まえてどのような今後どのような展望を考えていくのかを明らかにしていく。

７．総合考察

今回、地域の方々とワークショップ形式で話合いをすることで短期大学部保育科の学生は、授業、保育実習等から「子どもの発達」、「遊び」、「手作り玩具」など「保育」の専門性ついて学び、それが子育て支援にとっての「強み」になる。その「強み」を自分たち自身が地域の方々と交流をすることにより気づき、積極的に課題について考え、探究し、そして「協働」することの重要性を理解するのだろう。そして実践、行動へとつながることが、より大切であるという学びを深めていくのである。

「コレクティブ・インパクトアプローチ」という方法を参考に学生と地域の方々と繋ぐことを試み、地域での課題を一緒に考え、いくつかの団体と協働をし、保育科学生の強みを生かして「子育てマップ」の作成までを考えていたが、実施できなかったのが課題として残った。

しかしアンケートには、「地域の多様な人々」と話し合うことでア「地域」について以前より関わる大切さを学んでいることがうかがえた。初めは、不安なこともあると聞いていたが、ワークショップでは、始終和やかでビジョン委員の方々も熱心に話をしていただき、学生もっ話を積極的にしていた。発表をするときも学生の違った一面

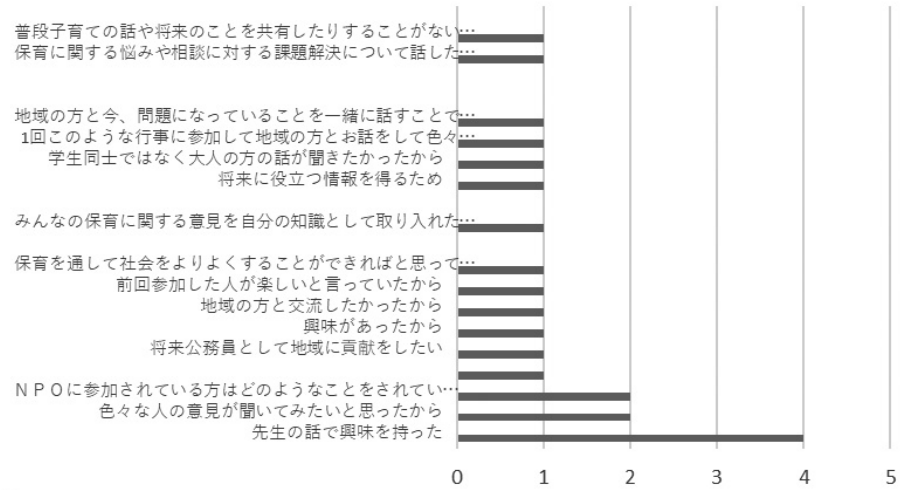

図３）質問１．今回参加した目的

「自己変容」を見ることができた。

今後の展望として授業とワークショップからビジョン委員、NPO カフェ、企業等々とつながり、学生の意見を現実化し、主体的に動いていく。そして地域の子育て支援を通して地域活性化をはかり、学生たちが主体となることにより学びを深め、課題解決力を高めることを目指したいと考えている。

また、「地域課題解決、地域創生」をテーマにどこまで「保育科の学生の強み」が活かせるのかが今後の課題ではあるが、授業、実習で経験したことも踏まえて地域の多様な人たちと積極的につながり、つながることで「課題解決」が導かれることを実感し、実践できる「教育」を目指すことが、新たな教育のあり方だといえるのではないだろうか。

８．おわりに

次の課題としては学生から出たアイデア「子育てマップ」作りを実践していき、「地域の子育て支援」に役立ち、課題解決に一歩でも近づきたいと考えている。今年に入り、コロナ禍で地域の方々との交流の場をもつ機会を作ることができなかった。NPO 団体の方と話すことはあり、活動をしているときにその方々のお子さんを見ることも子育て支援の１つではあるのだが、学生が「主体」であることを今後交流するときには理解をしていただき、対等に意見交換ができることにより、学生自身が自分事として社会の子育ての課題に向き合えることを伝える重要性を考えていきたい。

〈脚注〉

写真に関しては、文面を通して了解を得ている。

〈引用文献〉

１）厚生労働省『保育所保育指針解説書』2019年２月 p6
２）厚生労働省『保育所保育指針解説書』2019年２月 p4
３）厚生労働省『保育所保育指針解説書』2019年２月 p5
４）ディビット・ピーター・ストロー著『社会変革のためのシステム思考実践ガイド』英治出版 2018年10月 p6
５）溝上慎一著『アクティブラーニングとしての PBL と探求的な学習』東信堂　2016年３月 p10

〈参考文献〉

１．L. トーブ／ S. セージ著『PBL 学びの可能性をひらく授業つくり』北大路書房　2019年８月

2．ディビット・ピーター・ストロー著『社会変革のためのシステム思考実践ガイド』英治出版 2018年10月
3．溝上慎一著『アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習』東信堂　2016年3月